Front Line フロント・ライン

閑話独言

心の豊かさを大切に

弁護士
細谷　伸夫氏

山形商工会議所の専門指導員として、父芳郎の代から会員の法律相談を担当して随分となる。父は明治村灰塚（現・山形市灰塚）の生まれ。山形師範学校を卒業し上京。教師をしながら大学で学び、高等文官試験に合格し弁護士（第一東京弁護士会）となった。戦後、家族とともに引き揚げ、今の山形市役所敷地に在った湯殿山神社参道の雁島公園通りに事務所を構えた。当時、自宅とは別に弁護士事務所を置いたのは珍しく、知人が、「山形で初めてだ」と、よく口にしていた。

父の後を継ぐため私は東京五輪開催の昭和39年に早稲田大学法学部に進んだ。無論、授業には出ていたが、専ら山歩きに精を出した。上越国境、南北アルプス、飯豊、朝日縦走等々。年間100日は山の中にいただろうか。それとお茶。現在私は、田中仙樵（せんしょう）翁が創立した大日本茶道（ちゃどう）学会山形支部長を務めている。原点は学生時代で、きっかけは甘い話。「先輩がお茶の看板をとった。行けば饅頭（まんじゅう）を馳走してくれるそうだ」と、同級生の誘いに乗って20数人で饅頭目当てに押し掛けた。ところが…。お茶の稽古を重ねているうち、なぜか胸がすぅーっとした。むしゃくしゃしていた気持ちが吹き飛んだ。以来、お茶の世界に魅せられている。

東北弁護士会会長に昨年４月就任した。法的なトラブルは全国どこでも起こり得る。しかし、近くに弁護士がいないため、相談したり、解決を依頼できないケースが少なくない。これでは司法アクセスが十分保障されているとは言えない。東北の弁護士過疎・偏在解消に取り組んでいる。と同時に、弁護士の質向上も喫緊の課題。法科大学院制度によって司法試験合格者が一時、それまでの５倍となり、しっかりとした実務研修を受けないまま事案を扱う弊害が出てきた。弁護士は「生きた人間、生きた事実」が相手。依頼人に寄り添い、誠実に耳を傾け、そして現場を見る事がが基本だ。一方で刑法に触れたことが明らかなときは、間違いをただし、将来どう生きていけば良いか、考えさせる使命を持つ。事務所の新人弁護士（いそ弁）、司法修習生にそう指導している。

それにしても、最近は子供に無関心な親が増えて来た。少年事件を扱って愕然（がくぜん）とする事案に接する。生きることに必死と言えば聞こえは良いが、自己偏愛が多い。時代そのものがぎすぎすしていることも影響しているのではないだろうか。経済成長第一で、心の豊かさをもたらす文化を忘れがちだ。「立法」「行政」「司法」の三権と同様に、「経済」「社会資本」「文化」が分立し、調和されていることによって社会のバランスがとれる。

もうすぐ春。会員の皆さま、霞城公園の観桜会で開かれる野点（のだて）に足を運び、しだれ桜の下で、私がたてたお茶を楽しんでください。田中翁は、茶道を通じてだれもが日常を豊かにし、人生の支えにしてほしいと願いました。しばしの間、ゆったりとしたひと時を過ごしていただければ幸いです。

（山形商工会議所専門指導員）

今月の表紙　「香澄町　JR山形駅」

ふるさと画家・上野啓太氏作。「わが町」をテーマに、イラストでまちおこし運動を行っている「やまがたマーチング委員会」提供。